

幼児教育についての意見 子どもと養育者の関係性の視点から

2016年9月26日(月)

北川 憲

2016/9/26

アタッチメント理論について

- ・ 優先度の高い、本能的欲求
 - ・ 危機的状況・不安を、二者関係で調整するために、特定他者への接近(attach)を求める
 - ・ 生涯にわたる欲求だが、危機・不安への対処能力が限られている乳幼児期には、頻りに強いアタッチメント欲求が高まる
 - ・ 「安全・安心」の感覚があつて始めて、「探索」(子ども本来の好奇心を発揮するなど)が可能になる
- 大人の関わり: “感情のコップを満たそう”
気持ちに寄り添う「優しさ」と、毅然と子どもを守る「強さ」
- Powell et al. (2014) The circle of security intervention: Enhancing attachment in early parent-child relationships, Guilford Press.

2016/9/26

アタッチメントの個人差・問題

- ・ 特定の養育者にどうすれば効果的に接近できるか
→アタッチメントの個人差
 - 健全なアタッチメント(自立と依存のバランス)
 - 最小化方略(自分で抱え込むタイプ)
 - 最大化方略(人に頼りすぎるタイプ)
- ・ 深刻なアタッチメントの問題: 未組織型・無秩序型
 - 虐待など、安心の拠り所であるはずの養育者との関係で恐怖を体験
 - 子どもの不安が慢性的に調整されない
 - メンタルヘルスの問題へのリスクになる

2016/9/26

アタッチメントと発達

- ・ 子どもは、それぞれの養育者(持続的に、身体的・情緒的世話をする大人)との間で、関係特異的にアタッチメントを形成する。
 - ・ 乳児期に複数対象(父、母、保育者)と健全なアタッチメント→幼児期の社会情緒性と関連。
 - ・ 乳児期の保育者とのアタッチメントの質→9歳での教師との関係に関連。
 - ・ 親と不安定アタッチメントの低学年→学校で、教師に安心感や親しさを求める。
- “子どもは、より良く関わってくれる大人を見つけ、そこから少しでも肯定的に発達を促す要素を取り込もうと努力しているのかもしれない”
- 藤井みゆき(2005)「保育者と教師に対するアタッチメント」数井・遠藤編著『アタッチメント: 生涯にわたる絆』ミネルヴァ書房, pp.114-126

2016/9/26

アタッチメントと発達

- ・ 米国ミネソタ州の縦断研究
高校中退を予測する要因:
 - ①小学6年生での問題行動
 - ②乳幼児期の養育の質
 - ③小学6年生での親の関与(学校や仲間関係への)
 - ④小学1年生での問題行動
 - * IQは無関連。
 - “乳幼児期の養育の質が低く、小学生になっても親の関与が低いことの、学業への長期的リスク”
 - “問題行動←それ以前の養育+親自身が周囲のサポート不足で、ストレス高い”
- Sroufe et al. (2005) The Development of the person, Guilford Press, Pp.209-211.

2016/9/26

まとめ

- ・ 子どもにとって、親、祖父母や保育者、教師と、安全・安心できる関係が重要。
- ・ 安心感があって始めて、いわゆる「学び」(発達促進的な機会に集中して取り組むこと)が可能になる。
- ・ 誰もが「安心基地」を必要としている。
余裕がないとき、親もサポートが必要。
先生も、職場内や、研修などにより、支えられることが必要。

2016/9/26